



琉球大学学術リポジトリ

University of the Ryukyus Repository

Title	平成25年度トータル支援事業について
Author(s)	浦崎, 武
Citation	琉球大学教育学部発達支援教育実践センター紀要(5): 37-39
Issue Date	2014-03-31
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/28735
Rights	

平成25年度 トータル支援事業について

浦 崎 武*

Fiscal Year 2013 The Total Support Project

Takeshi URASAKI*

琉球大学教育学部附属発達支援教育実践センターでは2006年10月より実践トータル支援活動がスタートし、本年度で7年が過ぎ、8年目に入った。そこで、今まで取り組んできたことを整理することが必要である。この活動は「トータル支援教室」を中心的な事業として、今まで7年半で、122回の企画案を実践してきた。「トータル支援教室」は地域の子どもたちが支援を受け、保護者の子育てを応援し、現職教員、保育士、支援員、関連領域の専門家のリカレント教育の機会を提供し、大学院生や学生に実践教育の場を与え、行政などと協力して地域に貢献し、実践研究を深める支援を行っていることで、「トータル支援教室」と呼んでいる。また、子どもたちとの関わりを通して子どもの特性を多角的に捉え、支援教育の多様性を追求し総合的包括的に支援していく上でも「トータル支援教室」と呼んでいる。この教室は個別支援、集団支援、学校および教育機関との連携支援、子育て支援という4つの柱から成り立っている。活動への参加者は、子どもたちを支援することで、子どもたちから発達支援、教育実践を学ぶ。その活動の終了後、子どもたちとの関わりによるエピソードを具体的にとりあげ、反省会を行い、そして、その後、参加メンバーみんなで行う交流ミーティングを通して子どもたちの理解および支援のあり方を深めている。

当センターでは、昨年度、防音壁、安全な側壁、窓に柵を設置し、さらに本年度はプレイルームに鏡を取り付け、安心して安全を保障しつつ、実践に必要な環境を整備することができ、子どもたちの支援と支援スタッフの学びの場が充実した。また、「特別研究員制度」による特別研究員の活躍により、センター活動がより充実してきたことが実感できた。特

に23年度よりセンターの特別研究員（武田喜乃恵）が常駐することができたこともあり、充実した地域貢献活動、教育および研究活動を行うことができるようになった。本年度まで崎濱朋子（沖縄市立比屋根小学校教諭）、瀬底正栄（那覇市立小禄小学校教諭）、武田喜乃恵（発達支援教育実践センター）、金城明美（宜野湾市立長田小学校教諭）、大城麻紀子（沖縄県立森川特別支援学校教諭）、宮脇絵里子（育児休業中）、久志峰之（那覇少年鑑別所）、本間七瀬（石垣市立新川小学校教諭）、運道恵理子（石垣市立登野城小学校）、棚原こずえ（石垣市立みやなが幼稚園）10人の特別研究員が、子どもたちへの支援をするとともに、子どもたちから実践を学んできた。

定期的なトータル支援活動として「トータル支援教室（集団支援教室）」を月二回、教員、学生および支援教育に関する専門家を交えて「実践事例研究会」を月一回、また教員や保護者を対象にした「相談支援」、子どもたちに継続的なサポートが必要であれば定期的に支援を行う「個別支援」等を行ってきた。大学を拠点とする定期的なトータル支援活動は様々な事業の基盤をなす取り組みとなっており、具体的な地域協働活動のネットワークの要となっている。

センターの支援活動は8年目に入り、その支援論について『自閉症スペクトラム障害児・者の他者への〈向かう力〉と〈受け止める力〉の相互性—〈能動—受動〉の相互性に関する支援教育論的検討—（浦崎武）』と題して紀要にまとめた。また、地域拠点型の八重山の地域スタッフが中心となった「トータル支援教室 in 八重山」は3年目を迎えた。八重山教育事務所を中心とした石垣市教育委員会、竹富町教育委員会、与那国町教育委員会の実施体制も整い、支援プログラムも軌道に乗ってきた。八重山地域で

* Faculty of Education, Uni. of the Ryukyus

の取り組みの成果は『高機能自閉症をもつ低学年男児に対する内面世界に寄り添う適応支援—通級指導教室と集団支援教室における関わりを通して—(本間七瀬)』として紀要にまとめた。

さらに昨年度、国頭教育事務所の共催により金武町で実施してきた1日キャンプは本年度から沖縄市立比屋根小学校の子どもたちも加わり、中頭教育事務所の共催を得て、中北部地域連携活動へと発展した。積極的に離島・へき地に出向き、地域の土壤に触れながら子どもたちや支援教育に携わる先生や支援者と関わり、ともに学び合うことができた。

本年度は、例年、実施しているセンター事業に加え新たに沖縄県教育委員会からの教育学部への委託事業『学力向上先進地域育成事業：沖縄県の子どもの学びと育ちを支えるプロジェクト』に参画した。本センターでは「気になる子どもたちへの支援教育と教員への実践力養成システムの構築—「トータル支援教室」における学校支援の展開と「他者との繋がり」を育む教育実践—」と題して実践が行われた。本センターの特別研究員である崎浜朋子氏が教頭を務める沖縄市立比屋根小学校と共同実践研究を、1年間を通して実施した。その成果は3月に行われた『琉球大学教育学部附属教育実践総合センターの地域連携事業部門』の報告会において報告し、さらに紀要『特別支援学級と通級指導教室の連携による取り組み—自立活動における「みんなであそぶ活動」を通した「向かう力」のめばえ—(崎濱朋子 末吉麻紀 翁長文子 武田喜乃恵 浦崎武)』と題し、まとめた。

さらに3年目に入った「海プロジェクト(日本財団)」では、東京大学主催による第1回全国海洋教育サミットへの参加依頼を受け、今までの取り組みを報告することができた。総評においては、実践を高く認めてもらうコメントを戴くことができた。その成果を紀要『海をテーマにしたトータル支援教室の取り組みを通して—子どもたちの向かう姿から—(久志峰之 大城麻紀子 金城明美 浦崎武)』にまとめた。

大学中期計画実現のための「総合教育相談室」等の事業を行った。特に中期計画実現へ向けて、月1回の校内委員会および巡回相談を定着させ、附属小学校との連携を深め、「教育支援」、「相談支援」への一層の充実をめざした。また、相談機能が地域支援へと展開するように宮古地域の福祉保健所と多良間村教育委員会との連携による研修会を実施した。今後、子どもたちを集めた支援教室の発展を考えている。

当センターの地域貢献への取り組みは県内、県外に認知され、期待の高まりとともに、より一層の努力が求められていることを痛感した。

本紀要において当センターの本年度事業の実践研究の成果をまとめた。センターおよび八重山で実施してきたトータル支援教室における支援姿勢を『自閉症スペクトラム障害児・者の他者への〈向かう力〉と〈受け止める力〉の相互性—〈能動—受動〉の相互性に関する支援教育論的検討—』(浦崎武ほか)、八重山におけるトータル支援教室の集団支援と学校の協働実践研究として『高機能自閉症のある低学年男児に対する内面世界に寄り添う適応支援—通級指導教室と集団支援教室における関わりを通して—』(本間七瀬 浦崎武)、海プロジェクトの研究成果として地域協働による海企画について検討した実践研究『海をテーマにしたトータル支援教室の取り組みを通して—子どもたちの向かう姿から—』(久志峰之 大城麻紀子 金城明美 浦崎武)、大学で実施しているトータル支援教室における個別支援教室の長期的事例として『知的に遅れのない広汎性発達障害児童のトータル支援(4)—指示に反応し怒りを表出する小6男児との6年間のかかわり—』(金城明美)、学力向上先進地域育成プロジェクトに特別支援教室からの発信として『特別支援学級と通級指導教室の連携による取り組み—自立活動における「みんなであそぶ活動」を通した「向かう力」のめばえ—(崎濱朋子 末吉麻紀 翁長文子 武田喜乃恵 浦崎武)』を報告書として紀要にまとめた。

トータル支援事業

集団支援の実践研究

自閉症スペクトラム障害児・者の他者への〈向かう力〉と〈受け止める力〉の相互性―〈能動―受動〉の相互性に関する支援教育論的検討―（浦崎武 武田喜乃恵 瀬底正栄 崎濱朋子 金城明美 大城麻紀子 久志峰之 本間七瀬 運道恵理子）

地域協働プロジェクト：集団支援と学校の協働実践研究

高機能自閉症のある低学年男児に対する内面世界に寄り添う適応支援―通級指導教室と集団支援教室における関わりを通して―』（本間七瀬 浦崎武）

海プロジェクト：地域協働による実践研究

海をテーマにしたトータル支援教室の取り組みを通して―子どもたちの向かう姿から―（久志峰之 大城麻紀子 金城明美 浦崎武）

個別支援の実践研究

知的に遅れのない広汎性発達障害児童のトータル支援（4）―指示に反応し怒りを表出する小6男児との6年間のかかわり（金城明美）

学力向上先進地域育成プロジェクト

特別支援学級と通級指導教室の連携による取り組み―自立活動における「みんなであそぶ活動」を通じた「向かう力」のめばえ―（崎濱朋子 末吉麻紀 翁長文子 武田喜乃恵 浦崎武）